

香川県知事等南米移住各国訪問

前川知事の南米訪問視察

前川知事は、金子知事のあとを受けて3期12年間知事を務めたが、この時期の南米は各国とも県人会が設立されて移住県人の組織充実期であった。パラグアイ香川県人会、北伯地区香川県人会、ブラジルのサンパウロに南米香川県人会館、ボリビア香川県人会などが次々に設立された。前川知事は1979年(昭和54年)にブラジル県人会設立25周年記念式典に参列した。



南米訪問中の前川知事 北伯香川県人会の皆さんと

南米を訪ねて 香川県知事 前川 忠夫

県人会館の開館、サンパウロ

南米は、私の少年時代からのあこがれの大陸でした。できることならば、南米へ移住したいという夢も持っていました。しかし、戦争などがありまして、ついに五十年間、南米の地を見ることさえできませんでした。こういう南米大陸を、このたび、ブラジル、サンパウロの香川県人会発足二十五周年記念式典に、会長さんからのお招きにより、一ヶ月近く旅行させていただいたわけです。

南米における日系人は、一世、二世、三世を合わせると、約九十万人おられます。日本人の南米移住は、それぞれの地域で八十年、七十年、五十年という歴史をもっておられます。そして、その大部分はブラジルに住んでいます。そのなかで、香川県人は、約一万人といわれています。この方々のご要望によって、このたび、香川県人会館が、県人のもっとも多いブラジルのサンパウロ市に設けられたわけです。

この香川県人会館というのは、それほど大きい建物ではありませんが、小高い丘の上の快適な場所にあって、部屋の数が七つほどと、裏庭に五十人から百人ぐらいの集会ができる建物があります。盛大な開館式の後、引き続いて、ブラジル香川県人会二十五周年記念式典が行われました。日本から持参した表彰状にそえて銀杯などを一世の功労者に差しあげました。ところが、私も光栄ながらサンパウロ州知事から、すばらしい勲章を

いただきました。この行事が、こんどの南米旅行の直接の目的であり、また、いちばん重要な行事でもありました。

その他の国々や町は、香川県人が多く住んでいる所を選んで回ったわけです。それぞれ県人会があり、私たちが空港に降りますと、遠くから駆けつけた多くの方々が出迎えてくれました。なかには、千四百キロも離れたところから来られた方もいました。千キロや五百キロは、ほんの近くだそうです。「御遠路わざわざ」という言葉がピッタリというところです。

日本からまいりますと、日系人の皆さんは、母国、母県からやって来たといつて、本当に懐かしがって喜んで、大変な歓待を受けました。同時に私も、それぞれの方々の生活、あるいは入植以来のご苦勞をいろいろ伺いましたし、現在の状態も見せていただきました。

ブラジルへの日本人移住は七十年、香川県人の移住はそれから少し遅れましたが、だいたい七十年。従って、一世と呼ばれる方々は、次第に少なくなっております。現在は、ほとんど二世の時代に移っており、古く移住したところでは、三世の時代に入っています。

そこで、一世の人たちは香川県人会でお互いに親ぼくをはかりながら、母国、母県をしのんでおられます。しかし、一世の方々は、そういう気持ちが濃厚ですが、二世、三世になりますと、もうほとんど、おじいさんの国ということで、日本あるいは香川県に対する思いというものが薄らいでおります。

そのことを、一世の方々が非常にさみしがっておられましたし、どこに行きましても、そのような気持ちの話がありました。香川県人会館が、こんどできたことは、こうした心のよりどころができたということで、たいへん喜んでいました。

また、サンパウロでは、西本願寺別院に祭られている物故者の霊前に、黙とうを捧げ、また、日本人移住者全体の先没者慰霊碑にもお参りました。

さらに、ブラジル日本移民史料館を訪ねました。初期の移民は、横浜、神戸を出発し、太平洋をわたり50日あるいは60日という長い航海の後、ブラジルならば、サントスの港へ上陸したわけですから。その当時持っていたものとか、奴隷のような状態で働かされた入植移民の苦勞の記録や、生活用具といったものが、陳列されています。こうしたものを通じて、現在の成功されている方々の生活と、志成らず不遇に終わった移住者も多かったことを思い合わせますと、いろいろ感慨深いものがありました。今日の成功者の陰には、多数の先輩の苦勞や犠牲があったということ、教えられたわけですから。

ペルー・アルゼンチン・パラグアイ

ペルーとか、チリですが、これは太平洋にあり、雨が非常に少ない砂漠地帯です。しかし、日系人はそれぞれ頑張っておられます。

リマでは5泊しました。ここは砂漠で、ほとんど雨が降らないものですから、庶民の家にはほとんど屋根がありません。赤い土で焼いた赤レンガを壁にした、土塀ばかりのような家です。それに、空気がほこりっぽくて、街の灯がかすんで見えました。これが南米大陸第一歩の印象でした。

ペルーには、日系人は7万人ほどいます。うち香川県人は15家族、90人ほどです。リマに滞在中に、クスコに行って昔のインカ帝国の都の跡を見学しました。ナスカ平原の砂漠に書かれた謎の絵も見てきました。

それから、アルゼンチンは南米では最も気候もよく、肥よくな平野がひらけ、農業その他生活には欠けるところがないほど恵まれています。この国は日本からいって、ちょうど地球の向こう側にあります。ですから、日本が夏であれば、アルゼンチンは冬と、逆にすれば、向こうの様子が想像できると思います。この国には、日系人が3万人ほどおります。香川県人会は約100家族で、農業を中心に大活躍をしています。

次に行ったパラグアイは、あまり大きい国ではありません。しかし、それでも面積は日本の1.1倍ぐらいあり、人口は290万人ぐらいです。非常にまとまった、しかし、まだまだ未開拓の面を持っているのが、パラグアイです。香川県人ももちろんいます。特にイグアス移住地には数家族がおられました。数家族といつても、二世、三世とも生まれる子供の数が多いので、数家族で2、30人も集まってくれました。

ここでは、木陰でいろいろ心づくしの日本料理をごちそうになりました。われわれには、やはり日本の料理が口に合いますので、そのことに気を使っていたいただいて、つけ物とか、巻きずしとか、ミソ汁とか、あるいはおにぎりを用意してくれました。そして、木の根元にテーブルをいっぱい並べ、緑陰の食卓といいますか、非常にすばらしいパーティーを開いてくれました。これは旅行中各地であった楽しい経験です。

ブラジル・リオデジャネイロ

次は、ブラジルの首都ブラジリアにまいりました。ここは20年ほど前にブラジル政府が、サンパウロからジェット機で北へ2時間、ほとんど未開拓の標高千メートルほどの丘陵地に、政治の都として造った超近代的都市です。

南米大陸は、まだまだ世界的に未開拓の地ですが、ブラジリアだけは世界の先端をゆく都市です。現在、人口が65万人ほどで、日本をはじめ世界各国の大使館がここにあり、政治の施設が集中しています。しかし、あまりにも合理化、近代化されたデザインの建物や街並みは、一方的では潤いがないとか、殺風景だという批評もあるようです。いずれにしても、10年後、20年後にこの町はいったいどのようになっていくのか、ひとつ理想的な街づくりをしてもらいたいものだと思います。

サンパウロでは、先ほど述べた公式行事がありました。毎晩のように各分野の県人が集まり、歓待を受けました。

リオデジャネイロは、海岸と岩山の美しい都市で、金持ちがレジャーに別荘をもって、遊ぶ町のような感じです。海岸あり、山塊あり、地形的にも変化が多く、世界的にもこのように美しい町はないといわれています。しかし、山の上から展望すると、りっぱな建築物が並んでいるかと思うと、粗末な小さい建物の集落も見えます。こうした美しいりっぱな町にも、そうした部分があるということを見つめました。

ベレン・マナウス

さらに北に進み、アマゾン川河口のベレンを訪れました。アマゾン川流域は、南米でも最も未開拓の地域で、大地があり、大河あり、太陽があり、緑があり、何も欠けるものはなく、ただ人間がいないだけだということです。流域には、点々と小さな町があるようですが、訪れたのはベレンとマナウスです。

ベレンには、香川県人が10数家族おられ、そのうち、半分くらいのお宅を訪ねました。皆さん、現在はすばらしい農場を持っておられ、コショウとか、カカオとか、花とか、野菜とかを作っておられました。少ない人で、100ヘクタール、なかにはいくつもの農場、合わせて1,000ヘクタールもの大農場を経営している人もおられました。そのほか、ベレンの町で商業や貿易をされている方もおられました。

アマゾン川は世界の大河です。河口付近には、四国、九州に匹敵する島がありますので、その規模が想像できると思います。河口から直接距離で約1300キロ、川を船でさかのぼると、約1800キロの上流にあるのが、マナウスです。アマゾン川は、マナウスあたりでも、川幅が3、4キロもあり、2万トンぐらいの船がここまでやってくるそうです。マナウスに住んでいる香川県人は2家族です。養鶏をされている方と、日本文化協会の書記長をされている方でした。

私は、昔からアマゾンにあこがれていたものですから、マナウスでは特にカヌーに乗り、アマゾン川のジャングルを見て回りました。そのころ、南米では、どこへ行っても水が多く、アマゾン川もずいぶん水位が上がっていました。ジャングルだと思って入っても、中は全部水びたしでした。このアマゾン川は、さらに上流が2,000キロ、3,000キロもあり、コロンビア、ペルーにまで伸びています。このアマゾン流域は、私は特に興味深く見てまいりましたが、50年、100年後の世界の文明の中心は、アマゾンではないかと、そのような感じを強く受けました。

前川知事の第2回の南米訪問は1986年(昭和61年)9月、パラグアイ国

日本人移住50周年記念祭典に参列したことである。このときの紀行文がある。

遠くて近い南米大陸 前香川県知事 前川 忠夫

思いがけなく、再度南米旅行のチャンスが与えられた。パラグアイ国日本人移住50周年記念祭典に、平井知事の代理として参列することになったからである。知事退任後わずか3週間の9月26日出発、10月12日帰国の16日間の日程で、一行は庶務課の末澤春一郎君とわが輩と家内のわずか3人の身軽い旅であった。

まず、香川県人がもっとも多いサンパウロを訪ね、今雪浩三県人会長はじめ松家、内海、山下、香川さんたち旧知の方々にお目にかかり、南米香川県人会館に百人近い県人の皆さんが集まって下さり、盛大な歓迎会を催していただき恐縮した。7年前の開館式当時にくらべると、建物も立派に改修され、庭の木々も大きく茂り、記念植樹をしたイッペイやオリーブも大きく伸び、イッペイは黄色い今年の花を残してくれていた。

前回見残していたサンパウロ植物園を、植物に詳しい内海さんにご案内いただき、珍しい樹木や花木を教えられ大変勉強になった。内海さんはこの公園に香川県とは縁の深いメタセコイヤの樹林を育てる計画を楽しく語っておられた。

サンパウロ郊外の緑に包まれた快適な丘陵地帯に、最近操業を開始した日本企業ヤクルト工場がある。案内して下さった若林社長からひどく景気のよい明るいお話を伺った。

標高約800mの高原台地上にあるサンパウロから海岸のサントスの港へはジグザグの急坂を一気に下る。この港はかつて初期の南米移民船が入港した港である。日本から数十日間の長い船旅に耐え、不安と希望を胸に、家族手を取り合って、やっと南米の大地を踏んだ、明治大正期の同胞パイオニアの心中を思いめぐらし暗然とした。同行した元県人会長の松家さんも、このサントスの港に上陸した一人であったことを話され、しみじみ当時の思い出にふけておられる様子だった。

サンパウロからアスンシオンへ。パラグアイ県人会長であり、今回の50周年記念祭典の名誉委員長である笠松尚一氏をはじめ、岡本、森川、菅原さんたちに迎えられたが、各地から到着する祭典参加者の受付で空港は大変混雑していた。

パラグアイ国日本人移住50周年記念祭典は、常陸宮同妃両殿下をはるばる日本からお迎えして、9月30日の前夜祭から、10月1日の慰霊祭と夕食会、10月2日の記念式典、各種祝賀行事と晩さん会まで、大統領出席の3日間にわたるパラグアイ国挙げての大祭典であった。

私はほとんどの行事に出席したが、そのうち10月1日の慰霊祭は特に印象深いものであった。この慰霊祭はアスンシオンから南約130kmのラ・コルメラ教会で、開拓物故者の霊位にささげるミサの進行でおごそかに行われた。このラ・コルメラの地は、50年前日本人移住者が初めてこのパラグアイ国に入植した土地であり、以来営々として原始林を切り拓き、今日の見事な農牧地を作り上げた開拓発祥の地である。現在では当初入植した幾人かの健在な古老とその二世三世たち、74戸354人の日系人が農牧に従事しているという。

早朝アスンシオンからこのラ・コルメラまで140kmの道を案内して下さった笠松会長さんも、窓外の丘陵地を望みながら、このあたりで開拓地の測量に苦労したことなど、50年前の思い出を感慨をこめて話された。

この日の慰霊祭は白亜の教会堂を中心に広がる緑の芝生で催され、点々と茂る珍しい樹々は、祭典参加の人たちに、暑い直射日光を避ける快適な緑陰を提供してくれていた。このラ・コルメラの一日は、今回の全祭典行事のうちで、私にとっては最も印象深い心に残るさわやかな一日であった。

アスンシオン郊外の森川堅さんのご家族を入植地にお訪ねし、7年前よりは一段と整備された圃場やお宅にお邪魔して、白いご飯と味噌汁とタクアンの最高のご馳走をいただきながら、入植以来の開拓の苦楽について、あれこれとお話を伺った。日本から遠く離れたこの異郷の地で、不自由な衣食住と重労働の生活に耐えてきた日々にも、奥さんが俳句に親しむ心の

余裕をもっておられることを伺い救われる思いであった。

旅行も終わりに近づいてボリビアのサンタクルスに飛んだ。国際協力事業団支部長として最近着任した今雪史郎君はじめ、サンファン入植地の岡根さん、星野さんたちに迎えられ、滞在中大変お世話になった。

サンタクルス郊外140kmのサンファン移住地へは岡根さんの車で。「海外移住者だより」第22集(1986年)誌上に岡根さんが紹介されている「デツカイ獲物」を釣り上げたというヤバカニ川のはん濫河床の難路をやっと渡ってサンファン移住地へ。その中心地には、農協本部、学校、診療所、教会、飼料工場など公共施設が揃っている。

農協組合員は約160戸で大部分は北九州からの入植者で、うち香川県人は4家族である。岡根さんは主として、養鶏、星野さんは米、豆、みかんで、ともに成功され、開拓当時のご苦労は忘れたような笑顔で歓迎して下さいました。

標高4100~4200mのアンデス高原に飛び、懸念された高山病にもダウンせず、かねてからの念願のチチカカ湖畔に立ち、湖上の街にインカの昔を偲ぶことができたことは、今雪史郎君たちの配慮のお陰であり、私にとっては今回の旅行の大きい収穫の一つであった。

南米は地球上日本からもっとも遠い大陸だが、どこへ行っても日本人、香川県人にお目にかかれ、日本語で話しができ、日本食がいただける。まさに南米は日本からもっとも遠くて、もっとも近い大陸であると思う。

1988年(昭和63年)春の瀬戸大橋の開通と、記念博覧会にはぜひ母国日本、母県香川をお訪ね下さいという観光案内は、訪問した各国各地で大いにPRしてきたつもりである。

このたびの南米旅行は祭典の行われたアスンシオンをはじめ、サンパウロ、サントス、サンタクルス、ラパス、リオと巡訪したが、各地で県人会長さんをはじめ、移住された県人の一世二世三世の皆さんから、貴重な体験談を伺い、また大変お世話になった。特にこのたびは国際協力事業団の各地の支部長さんをはじめ関係皆さんに格別のご配慮をいただいた。ここに旅行中お世話になった皆さんに、厚くお礼申し上げます。